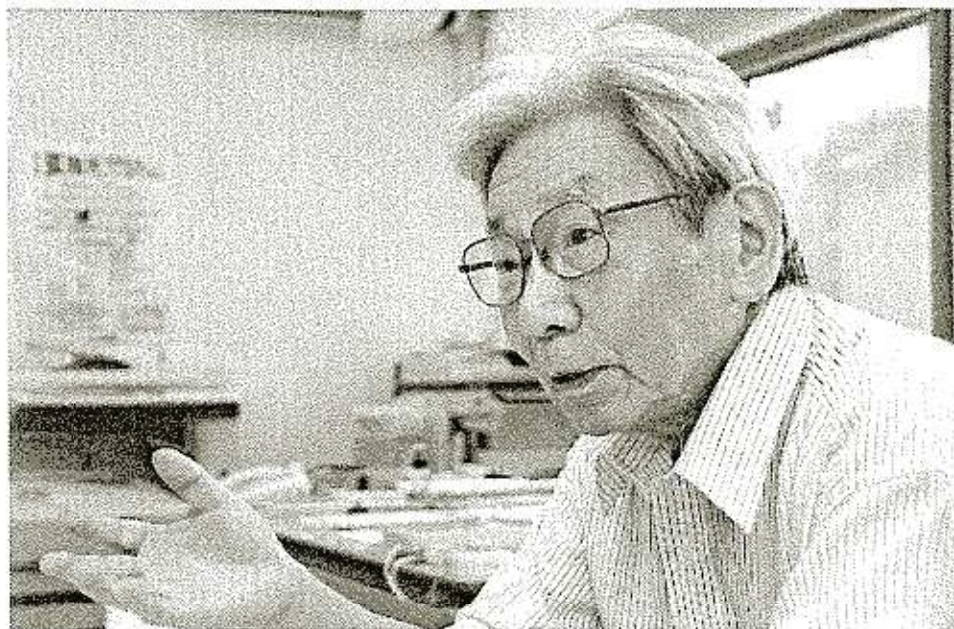


高齢者の孤独死防止に向け 絆を育む心の触れ合いを



ほんじょう・ありよし 1938年、徳島県生まれ。元映像プロデューサー。東京・新宿区の戸山団地自治会役員を経て、2007年に特定非営利活動法人「人と人をつなぐ会」を設立。現在、会長を務める。高齢者の孤独死防止を目的に、同団地でさまざまな活動に取り組む。http://npo-ppj.com/「見守りケータイ」に関する問い合わせは☎03(5330)3795まで。

か。数カ月、数年経って発見されるといったことが昨今、都会に限らず、全国で起きていくようになっていきました。ニューズで報じられるのは、全体の多くは一部に過ぎません。まずは孤独死を身近な問題として認識してほしいと思います。

——「人と人をつなぐ会」を設立したきっかけは

8年前に妻が他界し、団地の自治会役員を妻から引き継いだのがきっかけです。一人暮らしになったとはいえ、孤独死は他人事だと思っていました。ところが6年前、私の考えを一変させる衝撃的な場面に遭遇したのです。それは、周囲とまったく交流を持たない78歳の単身男性の死でした。役員の私は、警察から現場での立ち合いを求められました。1月ではありましたが、暖房を使用したまま亡

交流のきっかけを

——具体的にどのようなことに取り組んでいますか

都市部では若い人だけでなく、中高年でも近所付き合いをしない人が増えています。そこで、周囲との関係を閉ざしている一人暮らしの高齢者が地域のコミュニティに顔を出し、いろいろな人と交流するきっかけづくりをしようと考えました。農産物を販売

気配りとあいさつ

——孤立する高齢者に対して周囲ができることは

一人ひとりが近所のお年寄りに気配る——当たり前のようにですが、このことに尽きると言ってもいいでしょう。朝のあいさつ、また、道ですれ違うときにちょっと一言かけるだけでもいいんです。以前、団地の中に、とても頼りがいのある人が住んでいました。その人は進んで皆に声をかける「見守り隊」のような存在でした。その人が亡くなると、不思議なことに団地内での孤独死だけでなく、火災や自殺までも次々に起こるようになったのです。偶然の出来事かもしれませんが、私はその人が果たしていた役割の大きさを痛感せずにはいられません。一人でも多くの人に、そんな地域のキーマンとも言える存在になってほしい。そう思います。

人とかかわる努力

——一人で暮らす高齢者自身心がけることは

子供や親戚に自分から連絡をとってほしいということですね。しかし、これがなかなか難しい。特に高齢者は相手に迷惑をかけたくない、心配をかけたくないと思ってしまうんです。しかし、遠慮をしないことも大事です。子供や親戚がいなくても、ときにコールセンターに連絡して、悩みを相談してもいいと思います。どれだけ歳を重ねても、

身近な問題として

——増加する高齢者の孤独死をどのように見えていますか

私が暮らす戸山団地には、約2000世帯が入居し、そのうち単身の高齢者が4割を占めています。さすがにこの事情は特殊ですが、全国的に高齢者の一人暮らしが年々

誰にもみとられず、亡くなったあとに発見される「孤独死」は、年間3万件に達するともいわれている。特に高齢者の占める割合は高く、現代社会では看過できない問題だ。3年前にNPO法人「人と人をつなぐ会」を立ち上げ、単身の高齢者が多く暮らす東京・新宿区の戸山団地で孤独死防止に取り組む本庄有由さんは、その最大の要因として「人間関係の希薄化」を指摘する。「孤独死」を防ぐにはどうすればよいか。高齢者の現状、家族や周囲の人々の役割などについて聞いた。

増加しているのは事実であり、当然、それに比例して孤独死の件数も増えていくわけですが、そもそも孤独死とは、親族や友人など誰にもみとられずにひっそりと死んでいくこと。一人暮らしの方が自宅です。と、基本的に孤独死ということになりません。そこで問題になるのが、死後どれほど経ってから発見される



「人と人をつなぐ会」会長

本庄 有由さん

も事実ですから、有用なアイテムがあれば、それをうまく活用していくこともお勧めします。現在、所有者の居場所が特定できるだけでなく、折りたたみ式の携帯電話を開くだけで指定先にメールが自動発信される「見守りケータイ」があります。ワンッシュで24時間365日対応のコールセンターに接続できるサービスも開発されるなど、こうしたサービスを離れて暮らす親、また近隣の方に勧め、利用してもらおうのも一つの手段といえるでしょう。

活用していくこともお勧めします。現在、所有者の居場所が特定できるだけでなく、折りたたみ式の携帯電話を開くだけで指定先にメールが自動発信される「見守りケータイ」があります。ワンッシュで24時間365日対応のコールセンターに接続できるサービスも開発されるなど、こうしたサービスを離れて暮らす親、また近隣の方に勧め、利用してもらおうのも一つの手段といえるでしょう。

ええ。昔も今も、おそらく将来もそのことに変わりはありません。皆さんご存じのように、100歳以上の高齢者の所在不明が相次ぎ、大きな社会問題となっています。まさに、現代の日本では人と人との絆、かかわりが崩壊しつつあるわけです。

私自身、子供のころの近所付き合いを懐かしく思います。しかし、過去の幻想に浸ってはいけません。一人ひとりが家族や親戚、また近所の方に思いを寄せ、ぜひ、声をかけて頂きたい。やはり大切なのは人と人とのつながり、心と心の触れ合いだと思います。

どんなに長く一人暮らしが続いていても、人は常に人とつながってほしいという思いが根底にはあります。家族関係にさまざまな事情を抱えている人もいます。ですから、あえて相手を選定せず、自分から周囲と絆を持ち続けていく努力が重要です。

死後かなりの日数が経過して発見されるケースで男性が圧倒的に多いのは、そうしたことも一因だといえます。この集いをはじめとするさまざまな催し、そして住民の皆さんの協力のお陰さまで、長期間発見されない孤独死の件数は確実に減少しており、取り組みの成果を実感しています。

また、昨年から「おやじの集い」を年に数回開いています。70、80代の男性を中心に、皆で料理をつくり、それを味わいながら語り合うものです。あえて男性を対象にした理由があります。夫婦で暮らしてきた男性にとり、奥さんに先立たれるほど悲惨なことはありません。家事を奥さんに頼ってきた人が多く、一人になると本当に何もできないんです。また、男性は近所付き合いに消極的で、一人になるとふさぎ込んだような生活になりがちです。

また、昨年から「おやじの集い」を年に数回開いています。70、80代の男性を中心に、皆で料理をつくり、それを味わいながら語り合うものです。あえて男性を対象にした理由があります。夫婦で暮らしてきた男性にとり、奥さんに先立たれるほど悲惨なことはありません。家事を奥さんに頼ってきた人が多く、一人になると本当に何もできないんです。また、男性は近所付き合いに消極的で、一人になるとふさぎ込んだような生活になりがちです。

するイベントをはじめ、夏季は盆踊り、冬季は焼き芋を振る舞う集いなど、さまざまな行事を開催してきました。行事への参加くらいで、人の心が変わるものかと思う人もいるかもしれませんが、イベントを通して近隣の人々と触れ合ったことで、あいさつすらしなかつた人が、進んで世間話に花を咲かせるようになった例も少なくありません。